

# 庚申信仰の板碑と庚申塔

## 交通及び案内図

### 足立区立郷土博物館

JR亀有駅北口から東武バス六ツ木都住行バス「東洲江庭園」下車5分

または八潮駅北口行バス「足立郷土博物館前」下車1分

### 正覚院

東武伊勢崎線竹ノ塚駅東口から東武バス花畑団地行で「終点」下車10分



## 足立区のなりたちと板碑・庚申塔

足立区のはじまりは、古墳時代の毛長川沿岸の伊興遺跡で繰り広げられた祭祀と、外洋から内陸への水運中継活動等に求めることができます。中世以降には、淵江郷（一部舎人郷）という地域のまとまりができ、その範囲が江戸時代には淵江領（一部舎人領）、明治時代には南足立郡に受け継がれ現在に至っています。

足立区にとって、地域の歴史を特徴付ける文化財に板碑と庚申塔という石造物があります。現在までに板碑は313基、庚申塔は245基が区内に現存することが確認されています。

## 中世入間川下流と庚申信仰

中国の道教から発生し、古代日本に伝わった庚申信仰は、日頃体内に宿る三尸という想像上の虫が、60日で一巡する庚申の日の晩、体内を抜け出し天帝に日頃の罪悪を告げて死に至るので、徹夜をしてこれを防ぐ（いわゆる庚申待）と言う俗信です。平安時代の貴族もこれを行ったようです。時代が降るにつれ、徹夜で過ごすついでに酒食を用意し、談話に興じるなどレクリエーションの面が大きくなりました。地域社会で人々が、この習俗に集う会合が庚申講です。江戸時代、庚申講の数々の年の継続を記念して村の路傍等に建てられたのが「庚申塔」です。

庚申信仰にもとづく造塔活動は、15世紀後半から確認することができます。それは、秩父地方で切り出される緑泥片岩を用いて造られた「板碑」によって行われていました。

古い庚申信仰の板碑（いわゆる庚申待供養板碑）は、足立区を含む中世入間川下流域にまとまって分布しています。区内宮城から出土した、文明15年（1483）銘の庚申待



写真1：庚申待供養板碑

供養板碑（写真1 区登録文化財 足立区立郷土博物館常設展示）は、川口市の文明3年銘に次いでわが国で二番目に古く貴重なものです。ちなみに、3位は練馬区にある長享2年（1488）銘の板碑です。中世の庚申待行事のはじまりに、足立区を含めたこの地域が深く関わっていたことが推定されています。

## 板碑から庚申塔へ

板碑の造立は、戦国から江戸へ時代が転換するのとはほぼ同時に姿を消します。板碑に託された庚申信仰は、江戸時代になると庚申塔となって地域に現れてきます。実はこの画期にも、足立区とその周辺が鍵を握っていたことを物語る庚申塔が区内に存在します。

足立区花畑三丁目正覚院境内にある、元和9年（1623）銘庚申塔（写真2 区指定文化財）は、東京都区部で最も古い資料です。阿彌陀三尊を画像で彫刻し、9名の講員の名が刻まれています。その左上にいる「宝泉坊」は、庚申供養の導師を勤めた僧侶でしょう。

北区赤羽宝幢寺の寛永16年（1639）銘、荒川区町屋稻荷神社の正保4年（1647）銘の2基の古い庚申塔と、形式や内容のつながりがうかがえます。この状況から、江戸時代の庚申塔が、足立・北・荒川各区周辺で始まり広がって行ったことが推定されています。

以上、足立区と周辺地域が中世から近世の庚申信仰に伴う造塔が開始された地域であることがわかりつつあります。



写真2：元和9年銘庚申塔

## 問い合わせ先

足立区教育委員会文化課文化財係  
電話03-3880-5984